

透析医のひとりごと

「ネガティブ・ケイパビリティ」 齊藤喬雄

二月下旬に福岡透析医会総会があった。例年、総会では透析とは無関係な文化人の特別講演があり、それを聴くのが目的で出席することも少なくない。とくに、今年の演者は帚木蓬生氏なので楽しみにしていた。帚木氏は、精神科医を開業される傍ら、多くの小説を執筆し、数々の文学賞を受賞されている。医師会の仕事などをご一緒してきた九州大学旧第一内科の仁保喜之名誉教授には、お目にかかるたび、医療の話題より文学について何うのが常であるが、とくに帚木氏の経歴と小説について詳しくご教示いただいた。

帚木氏は東大文学部仏文科卒業後、九大医学部に入学し医師になられた。仁保教授が学生達に外国語で症例報告を書く宿題を出したら、翌日見事なフランス語の報告を書いてきた学生がおり、それこそが帚木氏であった。仁保先生のお勧めもあり、私もいくつかの小説を読んだが、ご専門の精神病の問題に関するものが多く、重厚で簡単に読み飛ばすわけにはいかなかった。そして、歴史小説や推理小説的な面も興味深く感じたが、留学されたフランスとくにプロバンス付近の料理の詳しい記載は実に楽しかった。

今回の演題「Negative Capability の力」における、ネガティブ・ケイパビリティは私にとって初めて聴く言葉であった。直訳では「負の能力」となるが、これでは意味がわからない。辞書を調べると、negative には「結果が出ない」という意味もあり、capability は単なる能力というよりは適応や受容の能力を示すらしい。実際、講演で氏は「答えの出ない事態に耐える力」と訳され、宙ぶらりんの状態への対応とも話された。ネガティブ・ケイパビリティが何かということが講演の主題であったが、ネガティブ・ケイパビリティを見出した英国の詩人キーツや、その概念を再発見して精神分析に適用した精神科医ビオンの劇的な生涯、彼らとさまざまな人々との交流の話は、帚木氏の小説のように面白かった。

キーツについて、私は高校時代の英文和訳例題で彼の文を読んだにすぎない。しかし、結核により異国のイタリアで客死するまでの 25 歳の人生を耐えるには、ネガティブ・ケイパビリティが大きな力となったようである。また、ビオンは、第一次世界大戦で軍人として戦功を上げ、第二次世界大戦に精神科医として従軍した後、精神分析医の大御所となり、当時知られていなかったキーツのネガティブ・ケイパビリティを発見する。

帚木氏によると、現代は問題点を早期に見つけて対応する能力、すなわちポジティブ・ケイパビリティがもてはやされ、医療でも、例えば診療録における SOAP 記載法のように、迅速な判断と解決が求められている。しかし、終末期医療や氏が専門とする精神科領域では、答を見つけることは難しく、粘り強く対応するネガティブ・ケイパビリティが重要であるとのことだった。講演を伺って、透析医療でもネガティブ・ケ

イパビリティは大切なのではないかと考えた。透析療法で命を永らえることができても、透析を続けなければ生活はままならない。この不確実な事態は患者が生きている限り続くが、それに対応するには物質的な充実だけでなく、精神的なネガティブ・ケイパビリティが不可欠であろう。そして、それは患者だけではなくそれを支える医療者の問題でもある。

帚木氏の講演に感銘を受けたものの、私の理解は十分でなかった。そこで、ネガティブ・ケイパビリティを詳記した氏の近著（朝日選書 958）があることを知り、早速購入した。その中には、講演で述べられた内容とともに、ネガティブ・ケイパビリティについてのさまざまな事例が記されており、キーツが影響を受けたシェークスピアの作品や、帚木氏のペンネームの由来になった源氏物語におけるネガティブ・ケイパビリティへの言及もあった。源氏物語は人生のさまざまな機微を描いているが、それらは紫式部より後の時代の「無常」という仏教の教えと類似している。しかし、「無常」が来世で仏に救われる他力を前提としているのに対し、定めなき現世を自力で耐えるネガティブ・ケイパビリティが根底にあるのが源氏物語の世界であり、その魅力ゆえに、この作品が時空を超えて世界的に評価されるのであろう。

帚木氏は最後にネガティブ・ケイパビリティに大事なものとして「寛容」、「共感」、「親切」について述べている。それらは、透析医療のみならず医療全体、さらには世の中のいろいろな事態を解決するキーワードであると私には思われた。

三光クリニック（福岡県）